

2018年10月26日

インドネシアのバリ島で国際通貨基金及び世界銀行の年次総会に反対する民衆世界会議が10月10～14日に行われたので中途参加した。10日と11日の前段の分科会は、警察の指示を受けた会場施設側が契約を一方的に取り消して開催できなくなっていた。会議側は元会場予定地のホテルの前と年次総会会場で抗議行動を行った。

12日。以上の情報を得て、本会議初日にバリ島に到着した。連絡が何とか取れて会場に到着できたが、会議はすでに終わっていた。ここでフィリピン人活動家と話した。前日フィリピンのミンダナオ島にある住友フルーツが経営するバナナ農園で、労組弾圧を続ける会社が暴力業者を雇い、ピケを張る労働者を襲撃させ、組合事務所を破壊し、多くの労働者が負傷したという。民衆世界会議は次のような声明を出した。

「民衆世界会議(PGC)の各国代表者らは、フィリピン・ミンダナオでストライキ中のNAMASUFAの労働者に対する暴力的攻撃を非難する。住友フルーツコーポレーション(スミフル)をはじめとする多国籍企業は、国際金融機関が作った新自由主義政策に基づいて、労働者の権利を意図的に無視し抑圧している。国際通貨基金及び世界銀行からの借金に支えられているフィリピン政府は、独占資本主義の金融機関が土地を手にし、反労働者政策を実施し、環境破壊活動を実施することを許してきている。私たちはストライキ中の労働者と同じ立場だ！ 国際通貨基金と世界銀行を粉砕しよう！」

その後、「連帯のタペ」に参加した。禁煙ではないようで、紫煙が立ち込める中、国内外の発言が続く。AWC日本連の旗を会場横に掲げたところ、大いに注目された。数人の参加者が「どこから来た？」と声を掛けてきたので応答した。後半はプロの歌手・グループの公演が続き、皆立ち上がって盛り上がった。

13日。朝、事務局からメールが届いていた。警察が全てのホテルを管理下に置くとともに活動家を厳しく監視している、民衆世界会議は以後の取り組みと日程を取り消す、参加者個々人との連絡は今後できない、またいつかともに活動できることを楽しみにしている——という趣旨だった。しかし会議は開催されるとのメールがその後来た。

労働者分科会と案内されたが実際は女性分科会の部屋で、三つの討論の輪のうち「労働」に参加。続いて、通訳なしの反原発分科会に参加。途中、学生だが農民運動に関わっているという女性活動家が話しかけてきた。その趣旨は次の通り。

地元の自警団が運動団体を襲撃したのは本当だ。けが人はなく、恫喝をかけてきた。地元の人間と言っているが、おそらく警察官だ。警察は地元の人間を騙ってSNS上で私たちに対する誹謗中傷を流している。数日前にスマトラ島で学生たちが年次総会に反対するプラカードをもって抗議行動をしたところ、警察が5分後に暴力的に排除した。これがジョコイ政権だ。ジョコイ政権はフィリピンのドゥテルテ政権と同じだ。違うのは過激発言をするか、何も言わずににこにこしているだけかだ。多くの人がジョコ大統領を改革派で民主的だと思っているが、実際は違う。新自由主義政策を進めている点では両者はそっくりだ。原発についても既に数基が稼働中で、新設計画も進んでいる(注・現在インドネシアには原発はないので稼働中というのは誤り)。学生運動はスハルト大統領退陣闘争が盛り上がった1990年代が頂点で、それ以降は下降している。その理由は分からない。当時の学生たちは社会変革にまで進まなかった。労働運動と農民運動は共に大きな規模だが、社会を変革する正しい路線を有している部分

は少ない。その部分の一つの戦線に入っている。中国は私たちの側だ。

インドネシアのその戦線に入っている組織を教えてくださいというこちらの要望に応えた彼女のメモによると、順に、

労働者 GSBI(Gabungan Serikat Bunian Indonesia インドネシア労働組合連合)、

農民 AGRA(Aliansi Gerakan Reforma Agraria 農業改革運動連合)、

学生 FMN(Front Mahasiswa Nasional 全国学生戦線)、

青年 PEMBARU(pemuda baru indonesia インドネシア新青年)、

女性 SERUNI(Serikat Perempuan Indonesia インドネシア女性連合)、

移民労働者 KABAR BUMI(Keluarga Buruh migran Indonesia インドネシア移住労働者家族)、

SDMN→ 学生(Serikat Demokratik Mahasiswa Nasional 全国民主学生連合)。

以上の全ての組織が統一戦線組織である FPR(Front Perjuangan Rakyat 民衆闘争戦線)に属している。

労働分科会へ移動。フィリピンの活動家が第4次産業革命に関する世界銀行のレポートを批判するブレゼンを行った。第4次産業革命は真の産業革命とは言えない、「経済大国」はサービス産業の比重が増し、最新鋭のロボット・機械が使用される一方で、「開発途上国」では工業の比重がますます増え、古いロボット・機械が使用されるようになり、単純労働が増加する。両者ともに労働者に対する搾取はひどくなる。そうした事態に「産業革命」という美名を付けたに過ぎない。技術・機械は中立で、もともと良い悪いといえるものではない。要はだれがそれをもっているかだ。「経済大国」の労働者も「開発途上国」の労働者も搾取されているのはいっしょであり、だから連帯して闘う必要がある——という趣旨だった。会議が終わり、歌った。当初の予定では翌日にデモ行進をすることになっていたが、何も決まっていないという。

14日。年次総会会場近くで青年活動家約五十人が奇襲デモを貫徹した。警察が暴力的に押し込めたが、抗議のシュプレヒコールは止まらなかった。

「国際通貨基金・世界銀行に反対する民衆世界会議」は以上の如く、ジョコイ政権・インドネシア警察の戒厳態勢の中、重弾圧に屈することなく、これを跳ね返して闘争方針を基本的に貫徹した。自国の資本家と地主、それらを支援し操る帝国主義の打倒を掲げて不屈に闘い続けるインドネシア労働者民衆とこれからも連帯し、帝国主義を打倒しよう。